

2年 現代文B 芥川龍之介「鼻」

2学年「現代文」では今年度、芥川龍之介の小説「鼻」を取り上げた。芥川龍之介といえば、「羅生門」が1年次の「国語総合」の教科書では定番ともいえるべき存在で、どの出版社でも採録されていることで有名であるが、発表当時はほとんど注目されなかった作品である。芥川の名が脚光を浴びたきっかけは、なんとといっても「鼻」を激賞した夏目漱石であろう。

「羅生門」の一年後に発表された「鼻」も「羅生門」と同様、古典作品に近代的解釈を盛り込んだ形を採っている。そして、原典と比較すると、芥川が古典作品の背景を借りながら、まったく別の世界を作り出していることに気づく。

「鼻」の原典は、「今昔物語集」本朝世俗部(三)巻28第20話 池尾禅珍内供鼻語である（「宇治拾遺物語」にも同様の話が存在する）が、原典では

- ・主人公である禅智内供の内面について、ほとんど言及されていない
- ・主人公は自分の長大な鼻について、ごく自然に受け入れている

というように、「鼻」を成立させる要素がことごとく存在しないのである。

原典では、長大な鼻の持ち主である禅智内供は、鼻のむず痒さのために、度々鼻を茹でて弟子に踏ませ、その結果、鼻は短くなる。その鼻は二、三日で再び元通りになるので、我慢できなくなるとまた、荒療治をする。これが繰り返されてきたとされている。

そして、食事の際に禅智内供の補佐（鼻を木の板で持ち上げる）をする童子が粗相をして鼻を粥の中に落としてしまい、内供は「自分とはもかく、もっと高貴な方の鼻を落としたらどうするつもりだ」と怒鳴りつける。怒られた童子が陰で、「あんな鼻の持ち主がほかにいるものか」とぼやき、周囲がどっと笑うというのがオチとなっている。

「鼻」では、主人公が長大な鼻について強いコンプレックスを抱いており、弟子のもたらした治療法によって、初めて長年の悩みが解消するという改変が行われている。そして、通常の鼻を手に入れた内供が、まさにそのことによって新たに直面する周囲のエゴイズムを描き出すことが可能になった。

従って、「鼻」を扱う上では、このコンプレックスとエゴイズムが重要な要素となる。芥川は、作品のテーマを明確に打ち出すためには、異常な事件を舞台とした方が有利であり、その異常性が読者に受け入れられやすいのが古典の世界であるという意味のことを述べている。現代文として扱う上では、我々自身の問題としてこのコンプレックスとエゴイズムについて深く考えさせたい。

初読の感想 (抜粋)

・今までも文豪の作品を何作か読んでいるが、読み慣れない表現が多い。

内供の自尊心を守るため、素直になれない様子が生々しかった。胸に刺さるものがあった、読みたくないと思うほどだった。しかし、内供は凄い人だとも思った。生まれつきの容姿に苛まれながらも、高い位の僧になり、人々に敬われる人間になったから。

・結局内供は、自分の意志というよりも周りにどう思われているかを一番考えている人なんだと思った。物語に出てくる人々の感情の変化が多すぎて読むのが忙しかった。

・すごく難しいお話だと感じました。コンプレックスを抱えている人は多いと思うし、どうしようもできず悩んでつらい思いをしてしまうなら、自分が自分のことを好きになって受け止めるのが一番の対処法なのかなと思いました。色々考えさせられるお話でした。一人一人違う個性を大切にできる社会になれば、内供が注目されることもなかったのかなとも思いました。最後の場面で少し気持ちが楽になったように書かれていて良かったです。

・禅智内供は、大きな鼻を持っており、それにより不便なことがあったりしていたので、人と大きく違う特徴のせいでコンプレックスを感じて悩んでしまうということだと思いました。また、そのコンプレックスが治っても、また別の悩みが生まれてくるところまで描かれていたのが、とても印象に残りました。深刻なコンプレックスであればあるほど、簡単なことではないけれど、自分で自分を否定せずやさしい目で見あげることが、悩みのループから抜け出す近道なのではないかと思いました。

・鼻に対してコンプレックスを持っている人物の物語だということは、一回読んでなんとなくわかった。

内供が鼻が長いのが理由で笑われるのが嫌で鼻を短くしたが、それについてもまた笑われて、最終的に元の鼻に戻って満足したと、一回読んだだけで内容の把握はまだ浅いが、ひとまずこのように読みました。コンプレックスが嫌で整形するっていうのがなんとも現代味があるなど、素直に読みました。

・内供は自分の鼻が嫌いで短くし、もう笑う者はいないだろうと思って満足していたが、逆に笑われるようになり、長かった鼻に戻ったとき、はればれとした心持ちになったことで、私は、人は無い物をほしがるけれど結局は元の自分が良いのだなと思いました。内供の容姿を見て笑う寺を訪れた侍や中童子などはひどい人たちだなと思いました。この話は現代で言うと整形する人やそれを見た人たちなのかなと思いました。

・私は、内供の鼻ほどではありませんが、自分の顔にコンプレックスがあるので、内供が自分と似たような鼻の人を探してしまう気持ちに、とても共感してしまい、かなり感情移入することができて、ものすごく面白かったです。

授業後の感想

・「鼻」という話は、人間の心理をととても深くそして的確に表していると思いました。禅智内供は、人より長い鼻を笑われることを気にしていましたが、実際にありそうなことがありとても面白いと思いました。内供のような鼻を持っている人はおそらく現実には存在しないだろうが、内供と同じコンプレックスを抱えている人は多いと思います。そしてそのコンプレックスを克服しようと工夫を凝らすこともあります。いちいち人の鼻に注目したり、いにしえの文献を読みあさったりする点は共感を呼ぶと思います。

・私にとって「鼻」の主題とは、周りの反応で人の気持ちはすぐ変化してしまうことと傍観者の利己主義だと思いました。

一つ目の理由は、内供は長い鼻を周りに言われ短い鼻にしたのに短い鼻になったらまた周りに言われ結局短い鼻ではなく長い鼻が恋しくなるといった意志の弱さを主題の一つにしているのではと思いました。

二つ目の理由は内供の長い鼻が短くなくても笑い、内供を不快にさせていたことです。人の不幸がなくなって周りがまたその人が不幸になるように仕向ける人の悪いところをこの「鼻」の主題の二つ目にしているのではと思いました。

・「普通」を「欲しがる」よりも、「愛する」ことが大事である。その大切さを教えるのがこの「鼻」の主題だと思います。

その理由は、鼻の大きさのせいで人の目を気にしながら生きる内供は「普通」になればこの生活から逃れられると思っています。ですが、鼻の大きさが「普通」になっても人から笑われる生活が続きました。その後内供の鼻の大きさが、「元の自分」に戻り、以前の生活になった内供は望んでいた小さな鼻よりもありのままの自分の方が生きやすいことを知ったと思います。このことからありのままの自分を好きになった方が生きていて楽しいことがわかります。「欲しがる」よりも「愛する」自分の方が素敵なのです。

・不幸な人の個人的な願いが叶うと、周囲の利己主義によって再び不幸に陥れられる。そんな「傍観者の利己主義」を描いた物語。周囲の反応を気にしていたら、悩みからは解放されない。大切なのは、自分の心の持ちようである。

・人間の性格の愚かさに心苦しいと感じた。この作品は「人の不幸を妬み、不幸を笑う」と定義しているようにその点を重大な問題点として上げているように感じられた。

現代社会を生きる私たちは、未だにその問題を解決することができていないように感じる。「鼻」という作品は一九一六年に発行されている。芥川龍之介はこの時すでにこの問題に苦しんでいたのかもしれない、そう感じた。実際芥川龍之介は服毒自殺をして三五歳という若さで亡くなっている。この大きな問題は、今の私たちを、今後の未来を生きる人たちを今後も苦しめるのかもしれない、そう感じた。

・この「鼻」という話の主題は、内供の鼻の変化に対する周りの人々の、内供への印象の変化にあると思った。

初めに人々は内供のことを可哀想だと思っていたが、それは、心のどこかで内供のことを下に見ているからこそ生まれる感情だと思った。可哀想だと思っていながらも、何も行動を起こしてこなかったのは、そのままいてほしいと見下していたからではないかと思った。そのために、可哀想だと見下していた鼻の変化によって、見下す部分のなくなった内供に対して人々は鼻が普通で変だと新しく見下す部分を作り出したのだと思った。

なので、内供にとっても何も解決していないと思った。

・私は「鼻」の主題は、人の自意識だと思います。理由は、自分では苦と思っていなかったことも、他人から色々言われたり見られているのを意識すると、「もっときれいにならなきゃ」とか、「こうしなきゃ」という自意識につながり、また、「鼻」でも他人に鼻のことを笑われ「鼻を普通にしたい」というような自意識につながっていると思ったからです。また、内供は鼻のみだったけど、現代ではマスク生活が普通になり、口や鼻、肌などにコンプレックスを持つ人がマスクを外したくないという人が増えています。そのように感じて内供も周りからの視線のせいで自分のコンプレックスを隠そうとしていたと思いました。

・「こうなれば、もう誰も笑う者はないにちがいない。」という文について私は考えた。

この内供の科白は二回登場している。一つ目は鼻が短くなった時、二つ目は鼻が長くなった時だ。二つは真逆の出来事なのに同じ科白を使っていることから、内供は鼻を短く治したかったのではなく、他人に、人間に、馬鹿にされたり、笑われたりしたくない、いいものだと思われていたいという周りばかり気にする人間なのかと私は考えた。

それが悪いとは思わないけれど、自分の欠点を知り、それでも共にそばにいてくれる人を大切にしたり、他人を思いやったりと、鼻を短くする努力より、自分の心を磨いて中身のある努力をすべきだと思いました。

・私は「鼻」の主題は人の欲望だと思います。自分のコンプレックスを受け入れるのではなく、どんな手を使ってでも変えたいという、人の欲望が出ている話だと思います。

人は結局は愚かで、どんな自分でもきつとなにか批判する人はいます。だから、周りの声や目を気にせずに、今の自分を少しずつでいいので肯定することが大切ではないかと思いました。また、コンプレックスも一周回れば一番の個性と思えるようになれば素敵なんだろうなと思いました。

・人間の持つ心の闇を考えさせられた。誰でもコンプレックスをなにかしら抱えていたりするもの。ありのままの自分を受け入れるのは難しいって改めて思った。

「鼻」構成図

第一段落

禅智内供の
長大な鼻と人物

鼻長

第二段落

鼻を持てあました
理由

第三段落

自尊心の毀損を
回復するための試み

第四段落

鼻の治療

治療の成功

鼻短

第五段落

周囲の悪意を感じ
る内供

第六段落

再び鼻が伸びた
内供

鼻長

禅智内供の鼻 長さが五、六寸 「細い腸詰めのように」

禅智内供の人物 五十歳を超えている 内道場供奉の職（高僧）

表面 澄ましている

鼻について

内心 苦に病んでいる

人に知られるのが嫌

実際の不便：飯の際に鼻を持ち上げてもらわなければならない

自尊心の毀損

消極的方法

① 鼻が短く見える角度の研究

② 寺に出入りする人の鼻の物色

③ 内典外典の人間の物色

同類を見つけて

安心したい

積極的方法

鼻の短くなる方法

例 烏瓜、鼠の尿

弟子の僧 鼻の治療法を教わる

内供 気にしないふり

「手数がかかるのが苦しい」

…策略

弟子 「口を極めて、この法を試みることを勧め出した」…反感

…同情

鏡の中の内供の顔

「こうなれば、もう誰も笑う者はないのに

鏡の外の内供の顔

ちがいない」

「のびのびした気分」

意外な事実の発見

周囲の笑い ・ 寺を訪れた侍 ・ 中童子 ・ 下法師

内供の解釈

顔変わりがしたせい … 「それもある」

それだけではなくまだ何かある … 「明が欠けていた」

「前にはあのようににつけつくとはい笑わなんだて」

作者の解釈

人間の心にある矛盾した二つの感情

同情

消極的敵意

他人の不幸

不幸から脱出した他人

傍観者の利己主義

不機嫌になる内供 ・ 弟子の僧 ・ 中童子

鼻が短くなったことを恨めしく思う内供

「忘れようとしていたある感覚」

「はればれとした心持ち」

「こうなれば、もう誰も笑う者はない」にちがいない」